



## ～助け合い 全員が輝き 悔いのなかった運動会～

校長 加納 素介

9月23日(土)、さわやかな秋晴れの下に運動会が開催されました。子どもたちは、取り組みの中でも運動会での勝利を目指し、全力の姿と真剣さを見せてきました。

そして、今回の運動会は、陶小学校のグラウンドで行う最後の運動会でした。子どもたちもそのことは感じていたようで、競技中も精一杯の声で応援する姿がありました。運動会が終わってからも応援団は、グラウンドで名残惜しむかのように、やり遂げた充実感を仲間としばらくの間味わっていました。

こうした子供たちの姿から、来年度からの新しい校舎、グラウンドでも新たな伝統をつくっていけるといふ手応えを感じました。多くの参加者の方からも「感動的であった。」というお言葉を頂き、児童、職員とも自信をもつことができました。運動会の開催に際し、ご多用の中をご家族の皆様、地域の皆様のご参観ご協力(助け合い)に厚くお礼申し上げます。



## 「心豊かでたくましくやりとげる陶の子」に

陶小学校の学校の教育目標は、「心豊かでたくましくやりとげる陶の子～やさしく かしこくたくましく～」です。運動会では、精一杯取り組む姿にたくましさを感じました。また、声を掛け合って励ます姿に優しさを感じました。学校が目指している「やさしさ」は望ましい人間関係の育成にあります。「相手の目を見て挨拶をしよう(アイコンタクト)」や、行事などで「仲間と助け合って目標に向かう」ことは、心豊かな子を育てることを目的としています。

作家の司馬遼太郎は、「二十一世紀を生きる君たちへ」という国語の教科書に載った作品の中で、「助け合うという気持ちや行動のものは、いたわりという感情である。」と語っています。そして、そのいたわりは、「本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身に付けねばならないのである。」と説いています。(下記はその作品からの抜粋)

心豊かでたくましくやりとげる陶の子、そのもととなる「いたわりという感情」は、訓練によって培われることを肝に銘じ、優しさのあふれる陶の子を育てていきたいと考えています。

## 二十一世紀を生きる君たちへ

司馬 遼太郎

(前略)人間は助け合って生きているのである。私は、人という文字を見るとき、しばしば感動する。ななめの画がたがい支え合って、構成されているのである。そのことでも分かるように、人間は、社会をつくって生きている。社会とは、支え合う仕組みということである。原始時代の社会は小さかった。家族を中心とした社会だった。それがしだいに大きな社会になり、今は、国家と世界という社会をつくり、たがいが助け合いながら生きているのである。自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくられていない。

このため、「助け合う」ということが、人間にとって、大きな道徳になっている。助け合うという気持ちや行動のものは、いたわりという感情である。他人の痛みを感じることも言ってもいい。やさしさと言いかえてもいい。「いたわり」「他人の痛みを感じること」「やさしさ」みな似たような言葉である。

この三つの言葉は、もともと一つの根から出ているのである。根といっても、本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身に付けねばならないのである。その訓練とは、簡単なことである。例えば、友達がころぶ。ああ痛かったろうな、と感じる気持ちを、そのつど自分の中で作りあげていきさえすればよい。この根っこの感情が、自分の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。

君たちさえ、そういう自己をつくっていけば、二十一世紀は人類が仲よしで暮らせる時代になるにちがいない。(後略)

# 陶苑



瑞浪市立陶小学校 校報

平成29年9月29日 No.6

HP <http://suesho.city.mizunami.gifu.jp/>

## ～助け合い 全員が輝き 悔いのなかった運動会～

校長 加納 素介

9月23日(土)、さわやかな秋晴れの下に運動会が開催されました。子どもたちは、取り組みの中でも運動会での勝利を目指し、全力の姿と真剣さを見せてきました。

そして、今回の運動会は、陶小学校のグラウンドで行う最後の運動会でした。子どもたちもそのことは感じていたようで、競技中も精一杯の声で応援する姿がありました。運動会が終わってからも応援団は、グラウンドで名残惜しむかのように、やり遂げた充実感を仲間としばらくの間味わっていました。

こうした子供たちの姿から、来年度からの新しい校舎、グラウンドでも新たな伝統をつくっていけるという手応えを感じました。多くの参加者の方からも「感動的であった。」というお言葉を頂き、児童、職員とも自信をもつことができました。運動会の開催に際し、ご多用の中をご家族の皆様、地域の皆様のご参観ご協力(助け合い)に厚くお礼申し上げます。



## 「心豊かでたくましくやりとげる陶の子」に

陶小学校の学校の教育目標は、「心豊かでたくましくやりとげる陶の子～やさしく かしこくたくましく～」です。運動会では、精一杯取り組む姿にたくましさを感じました。また、声を掛け合って励ます姿に優しさを感じました。学校が目指している「やさしさ」は望ましい人間関係の育成にあります。「相手の目を見て挨拶をしよう(アイコンタクト)」や、行事などで「仲間と助け合って目標に向かう」ことは、心豊かな子を育てることを目的としています。

作家の司馬遼太郎は、「二十一世紀を生きる君たちへ」という国語の教科書に載った作品の中で、「助け合うという気持ちや行動のものは、いたわりという感情である。」と語っています。そして、そのいたわりは、「本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身に付けねばならないのである。」と説いています。(下記はその作品からの抜粋)

心豊かでたくましくやりとげる陶の子、そのもととなる「いたわりという感情」は、訓練によって培われることを肝に銘じ、優しさのあふれる陶の子を育てていきたいと考えています。

## 二十一世紀を生きる君たちへ

司馬 遼太郎

(前略)人間は助け合って生きているのである。私は、人という文字を見るとき、しばしば感動する。ななめの画がたがいに支え合って、構成されているのである。そのことでも分かるように、人間は、社会をつくって生きている。社会とは、支え合う仕組みということである。原始時代の社会は小さかった。家族を中心とした社会だった。それがしだいに大きな社会になり、今は、国家と世界という社会をつくり、たがいが助け合いながら生きているのである。自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくられていない。

このため、「助け合う」ということが、人間にとって、大きな道徳になっている。助け合うという気持ちや行動のものは、いたわりという感情である。他人の痛みを感じることも言ってもいい。やさしさと言いかえてもいい。「いたわり」「他人の痛みを感じること」「やさしさ」みな似たような言葉である。

この三つの言葉は、もともと一つの根から出ているのである。根といっても、本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身に付けねばならないのである。その訓練とは、簡単なことである。例えば、友達がころぶ。ああ痛かったろうな、と感じる気持ちを、そのつど自分の中で作りあげていきさえすればよい。この根っこの感情が、自分の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。

君たちさえ、そういう自己をつくっていけば、二十一世紀は人類が仲よしで暮らせる時代になるにちがいない。(後略)





## ～助け合い 全員が輝き 悔いのなかった運動会～

校長 加納 素介

9月23日(土)、さわやかな秋晴れの下に運動会が開催されました。子どもたちは、取り組みの中でも運動会での勝利を目指し、全力の姿と真剣さを見せてきました。

そして、今回の運動会は、陶小学校のグラウンドで行う最後の運動会でした。子どもたちもそのことは感じていたようで、競技中も精一杯の声で応援する姿がありました。運動会が終わってからも応援団は、グラウンドで名残惜しむかのように、やり遂げた充実感を仲間としばらくの間味わっていました。

こうした子供たちの姿から、来年度からの新しい校舎、グラウンドでも新たな伝統をつくっていけるといふ手応えを感じました。多くの参加者の方からも「感動的であった。」というお言葉を頂き、児童、職員とも自信をもつことができました。運動会の開催に際し、ご多用の中をご家族の皆様、地域の皆様のご参観ご協力(助け合い)に厚くお礼申し上げます。



## 「心豊かでたくましくやりとげる陶の子」に

陶小学校の学校の教育目標は、「心豊かでたくましくやりとげる陶の子～やさしく かしこくたくましく～」です。運動会では、精一杯取り組む姿にたくましさを感じました。また、声を掛け合って励ます姿に優しさを感じました。学校が目指している「やさしさ」は望ましい人間関係の育成にあります。「相手の目を見て挨拶をしよう(アイコンタクト)」や、行事などで「仲間と助け合って目標に向かう」ことは、心豊かな子を育てることを目的としています。

作家の司馬遼太郎は、「二十一世紀を生きる君たちへ」という国語の教科書に載った作品の中で、「助け合うという気持ちや行動のものは、いたわりという感情である。」と語っています。そして、そのいたわりは、「本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身に付けねばならないのである。」と説いています。(下記はその作品からの抜粋)

心豊かでたくましくやりとげる陶の子、そのもととなる「いたわりという感情」は、訓練によって培われることを肝に銘じ、優しさのあふれる陶の子を育てていきたいと考えています。

## 二十一世紀を生きる君たちへ

司馬 遼太郎

(前略)人間は助け合って生きているのである。私は、人という文字を見るとき、しばしば感動する。ななめの画がたがい支え合って、構成されているのである。そのことでも分かるように、人間は、社会をつくって生きている。社会とは、支え合う仕組みということである。原始時代の社会は小さかった。家族を中心とした社会だった。それがしだいに大きな社会になり、今は、国家と世界という社会をつくり、たがいが助け合いながら生きているのである。自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくられていない。

このため、「助け合う」ということが、人間にとって、大きな道徳になっている。助け合うという気持ちや行動のものは、いたわりという感情である。他人の痛みを感じることも言ってもいい。やさしさと言いかえてもいい。「いたわり」「他人の痛みを感じること」「やさしさ」みな似たような言葉である。

この三つの言葉は、もともと一つの根から出ているのである。根といっても、本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身に付けねばならないのである。その訓練とは、簡単なことである。例えば、友達がころぶ。ああ痛かったろうな、と感じる気持ちを、そのつど自分の中で作りあげていきさえすればよい。この根っこの感情が、自分の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。

君たちさえ、そういう自己をつくっていけば、二十一世紀は人類が仲よしで暮らせる時代になるにちがいない。(後略)